様式第5号（第9条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

報告番号		氏　名	長谷川　泰司

Presence of foveal bulge in optical coherence tomographic images in eyes with macular edema associated with branch retinal vein occlusion.

（和訳） 網膜静脈分枝閉塞症に伴う黄斑浮腫眼における光干渉断層計での中心窩視細胞内節外節ラインの隆起（foveal bulge）の評価

【目的】網膜静脈分枝閉塞症(branch retinal vein occlusion: BRVO)による視力低下の主な原因として黄斑浮腫がある。その病態には血管透過性亢進作用を併せ持つ血管内皮増殖因子(vascular endothelial growth factor: VEGF)が深く関与しており、現在は抗 VEGF 療法が第一選択薬となっている。

光干渉断層計(optical coherence tomography: OCT)で観察される視細胞内節外節ライン(IS/OS line)の連続性は視力を規定する最も重要な所見として多数の報告がされているが、その連続性に注目するだけでは正確な視細胞層の健常性評価が難しく、IS/OS line の形状についてさらに詳しく検討する必要がある。正常眼の IS/OS line は中心窩で上方へ盛り上がる形状(foveal bulge)を呈しており、本研究ではこの foveal bulge の有無に注目し、黄斑浮腫消失後の視力との関係について検討した。

【対象と方法】BRVO に伴う黄斑浮腫のうち、最終受診時には黄斑浮腫が消失し中心窩の IS/OS line が連続性を保っている 31 例を対象とした。BRVO 眼の 31 眼を foveal bulge の有無で 2 群に分け、それぞれの初診時及び最終受診時の検査所見を比較検討した。

【結果】Foveal bulge あり群は 7 眼、なし群は 24 眼であり、最終受診時の logMAR 視力は foveal bulge あり群で有意に良好であった（Mann-Whitney U test、P <0.0001）。初診時 OCT 所見では foveal bulge なし群で中心窩の外境界膜不整および漿液性網膜剥離の合併が有意に多かった（Fisher exact probability test、P = 0.0124、P = 0.0017）。

【結論】Foveal bulge の有無は中心窩視細胞の健全性を示す重要な所見であると考えられた。網膜硝子体疾患に関する視機能の大部分は中心窩が担っており、その健常性の評価は治療時期の決定や視機能予後を考えるうえで重要である。従来では IS/OS line が連続しているかどうかだけの評価であったが、foveal bulge の有無に注目し詳細に検討することで、中心視機能がどの程度保たれているのか、どの時期に障害されるのかなどの正確な評価が可能になると期待される。